

紋枯病は多発田のみで省力的に防除！

1 はじめに

紋枯病は、夏に感染したイネの病斑上に形成された菌核が圃場内の土中で越冬し、翌年のイネに感染するため、毎年同じ圃場で発生しやすい病害です（図1、2）。そこで、簡易見取り調査と苗箱への施薬によって、省力かつ効果的に紋枯病を防除できる方法を開発しました。



図1 紋枯病の病徴

図2 病斑

2 紋枯病の隔年防除技術の検討

紋枯病の発病株率を2年に渡って継続的に調査したところ、無防除では2年目の発病株率は1年目からわずかに増加する一方、防除を行うと発病株率が大幅に低下していました（表1）。

これらの結果から、防除によって一度減少した紋枯病が再び増加するためには、その後数年が必要と考えられます。したがって、紋枯病の防除を行った圃場では、紋枯病の発病株率が要防除水準に達するまでの数年間、防除を省略することができると考えられます。

表1 紋枯病発病株率の経年変化

圃場	発病株率(%)	
	H27年	H28年
少発無防除田	14	17
中発無防除田	41	47
多発無防除田	61	61
多発防除田	66	17

※防除田ではH28年に苗箱施薬剤を施用

3 紋枯病の簡易見取り調査法と要防除水準

【調査方法】収穫期に圃場の長辺100株、短辺50株について、畦畔から見歩きで紋枯病の有無を調査してください。調査後は、以下の式を用いて発病株率を計算してください。

発病株率(%) = (長辺の発病株数+短辺の発病株数) / 150 × 100
 発病株率がいちほまれで40%、あきさかりで25%以上の圃場は翌年5%の減収が予想されるため、次年度の防除が必要です（図3）。

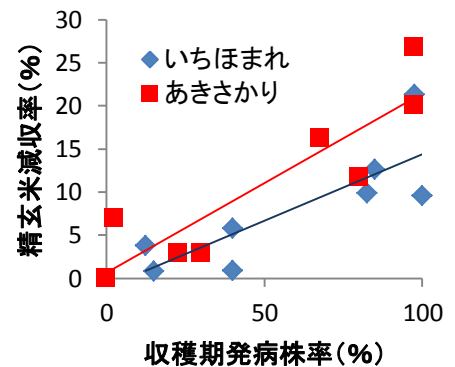


図3 発病株率と減収の関係

4 苗箱施薬による紋枯病の防除効果と注意点

次年度に多発生が予想された際に、春の苗箱施薬剤処理による早期防除を行うことで、被害を最低限に抑えることができます（表2）。

表2 苗箱施薬剤の紋枯病に対する効果（収穫期被害度より算出）

供試薬剤	防除価	
	あきさかり	いちほまれ
エバーゴルワイド箱粒剤	71	88
箱いり娘粒剤	79	84
Dr.オリゼフェルテラグレータム箱粒剤	64	36
無処理	-	-